



筑紫女学園大学リポジト

場所格交替におけるカテゴリー分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/944

場所格交替におけるカテゴリー分析

緒 方 隆 文

A Semantic Network of Locative Alternation

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿では場所格交替を取り上げ、構文の意味と特徴をカテゴリースキーマを通して分析する。ここでの結論は、場所格交替を起こす構文の意味は、他動詞文は〈移動〉、自動詞文は〈出現〉とする。そしてどちらも、スキーマの一部を前景化・背景化することで、場所格交替がおこるとする。

まずスキーマだが、〈移動〉のスキーマでは2つの移動が連動する。移動物 a が場所 β へ移動する〔移動物移動〕と、場所 β が結果状態 δ へと移動する〔場所変化移動〕の2つがある。そして交替現象は、片方の移動が前景化され、残りが背景化されることでおこると主張する。一方〈出現〉のスキーマでは、上記の移動物移動が出現物出現に変わる以外は、同じ構造のスキーマになる。そして〈移動〉と同じプロセス、つまり焦点が推移することで、同様に場所格交替がおこる。この2つの意味には、焦点化と移動着点にオプションがあり、計8つのスキーマがあることを示す。

さらに場所格交替が起こらないスキーマ、前置詞句の省略可能性、全体的解釈と部分的解釈の違いについても、カテゴリースキーマを通して分析する。さらにここでの〈移動〉と〈出現〉の意味は、意味のネットワーク上に位置づけられることを示し、意味の派生の方向性を示していく。最後に、他構文で場所格交替動詞が現れる場合を考察していく。

2. 場所格交替

ここでは場所格交替構文の意味を、カテゴリースキーマで表すことを目的とする。結論から言えば、他動詞文の意味は〈移動〉、自動詞文の意味は〈出現〉のスキーマで示されることを見ていく。各々の意味はさらに、場所が特定か不特定かで2つに分けられ、計8種類あることを示す。それに加えて、交替不可の動詞、前置詞句省略の可否なども、カテゴリースキーマを通して考察していく。

まず場所格交替構文は、他動詞文と自動詞文がある。(1)のような他動詞文の場合、目的語と前置詞句で交替が起こる。(1a)タイプでは移動物が目的語、着点となる場所が前置詞句になる。(1b)タイプでは着点となる場所が目的語、移動物が前置詞句となる。次に(2)のような自動詞文の場合、主語と前置詞句で交替する。(2a)タイプでは出現物が主語、出現する場所が前置詞句になる。(2b)タイプでは出現する場所が主語、出現物が前置詞句となる。これをスキーマを通して説明する。

(1) a. We loaded hay onto the truck. b. We loaded the truck with hay.

(2) a. Bees swarm in the garden. b. The garden swarms with bees. ((1)(2) : Dowty 2000: 111)

日本語の場合、前置詞句の代わりに後置詞句が用いられ、同様の交替現象が見られる。(3)が他動詞文、(4)が自動詞文となり、役割については(1)(2)と並行的になる。

(3) a. ジョンは、壁にペンキを塗った。 b. ジョンは、ペンキで壁を塗った。

(4) a. 車が道路にあふれていた。 b. 道路が車であふれていた。 (岸本 2001: 102-103)

ここで便宜上、各構文を次のように呼んでいく。まず移動物／出現物が目的語や主語にくる(1a)(2a)タイプを移動物／出現物構文とする。細かくは(1a)を移動物目的語構文、(2a)出現物主語構文とする*¹。次に場所が目的語や主語にくる(1b)(2b)タイプを場所変化構文と呼ぶ。細かくは(1b)を場所目的語構文、(2b)場所主語構文とする。日本語での呼び方も同様とする。

この移動物／出現物構文と場所変化構文は、単に語順が違うだけではなく、意味するところも異なる。Jackendoff (1990: 130) が示すように、各構文を擬似分裂文にすると適格性に違いが生じる。

(5) a. What Bill did to the books was load them on the truck.

b. ?What Bill did to the truck was load the books onto it. (Jackendoff 1990: 130)

(6) a. What Bill did to the truck was load it with books.

b. *What Bill did to the books was load the truck with them. (Jackendoff 1990: 130)

(5)は移動物目的語構文からの擬似分裂文で、移動物が移動する意味になる。そのため(5b)のように場所に焦点を当てると不自然になる。同様に(6)では場所変化構文からの擬似分裂文で、状態変化を意味する。そのため(6b)のように移動物に焦点を当てると不適格となる。つまり各々の構文は、力点を置いている箇所が違い、それに伴い意味が異なってくる。

意味の違いは、力点の置きかえにある。そもそも場所格交替は、(i)移動物移動またはモノ出現の意味と、(ii)場所の状態変化の2つの意味を合わせ持つ動詞でおこる。モノ出現について語る論文はないが、移動と状態変化の2つの意味が必要なことは従来の研究で認められてきた (cf. Pinker 1989 他)。しかし問題はこの2つの意味の関係にある。別個に存在するのか、連動した一つのものになるかである。Pinker (1989) が示唆するように、移動の意味は「XがYをZに動かす」で、場所の状態変化では「YがZに動くことによってXがZの状態変化を起こす」という意味になる。大切なのは状態変化で、移動の概念を前提としている。つまり2つの意味は連動している。本稿ではそれを一歩進め、2つの意味は、一つのカテゴリースキーマの中で連動していると考える。そして焦点の違い、もっと言えば前景化・背景化のパターンによって、2つの意味が生じると考えていく。

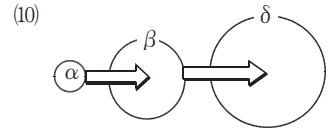
まず移動物移動の基本スキーマから考察する。この意味では(7)(8)に示すように、もっぱら他動詞文で用いられる。(7)は他動詞文で交替が起こるが、(8)は自動詞文で交替しない。この意味を取るものに(9)のような動詞がある。SPRAY/LOAD VERB と呼ばれる動詞がここに相当する。

(7) a. Jack sprayed paint on the wall. b. Jack sprayed the wall with paint. (Levin 1993: 51)

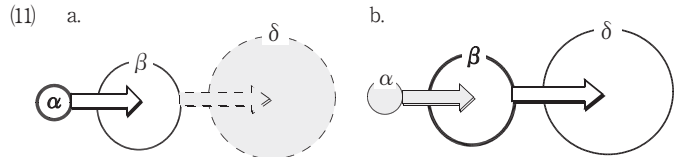
(8) a. Paint sprayed on the wall. b. *The wall sprayed with paint. (Levin 1993: 118)

(9) brush, cram, crowd, cultivate, dab, daub, drape, drizzle, dust, hang, heap, inject, jam, load, mound, pack, pile, plant, plaster, ?prick, pump, rub, scatter, seed, settle, sew, shower, slather, smear, ... (Levin 1993: 50)

この〈移動〉の場所格交替構文は、(10)のカテゴリースキーマを基本形に持つとみなす。(10)では α (モノ) が β (場所) に移動した結果、 β (場所) が δ (結果状態) に移動する (状態変化がおこる)。どちらの移動でも最終的には、カテゴリー関係 (カテゴリーと成員の関係) が生じる。最初の移動では、物 α が場所 β に移動し、カテゴリー関係が生じる (カテゴリーは β 、成員は α)。後者の移動では、場所 β が属性 δ に移動し、カテゴリー関係が生じる (カテゴリーは δ 、成員は β)。属性 δ の成員になるとは、その属性を持つこと、ひいては状態変化したことを意味する。例えば属性で赤というカテゴリーの成員になるということは、赤くなるという状態変化が起こることを意味する。つまりここでは物理的移動も状態変化も、等しく〈移動〉と考え、移動の結果、カテゴリーと成員の新たな関係が生じると考える。

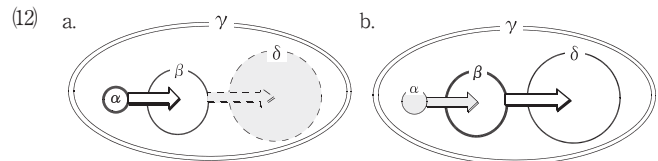


スキーマ(10)を基本として、移動物構文と場所変化構文を考察する。この2つは、スキーマ(10)を共有しつつも、(10)のどの部分を前景化し背景化するかで異なる。言い換えれば、2つの移動は、同時に前景化されることはなく、どちらか一方だけが前景化される。それを示したのが(11)になる (移動物は各々太線表記)。(11a)が移動物



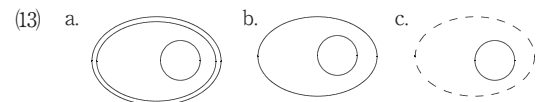
主語構文、(11b)が場所主語構文になる。(11a)では移動物移動が前景化され、場所変化移動が背景化される。ここでは場所の状態変化は意識されず、含意も弱いいため、破線表記になっている。一方(11b)では、場所変化移動が前景化される。この場所の状態変化は、移動物移動を前提としており、背景化されるとはいえ、含意はある。そのため移動物移動部分は、実線で表記されている。

この(11)に主語カテゴリー γ が加わる。それを示したのが(12)になる。(12a)が移動物目的語構文で、(12b)が場所目的語構文になる。本稿では



主語を使役者として表現しない。成員となるモノやイベントをコントロールしたり、関与する場合、カテゴリーと成員の関係で表現する。つまりコントロールしたり、関与するものを成員とみなす。そのため(12)では、(11a, b)を成員とする主語カテゴリー γ が加わっている。

この関与の仕方は基本3つ、強く・普通・弱くがある。それを示したのが(13)になる。(13a)は緊密度が高く、成員への関わりが強い。使役



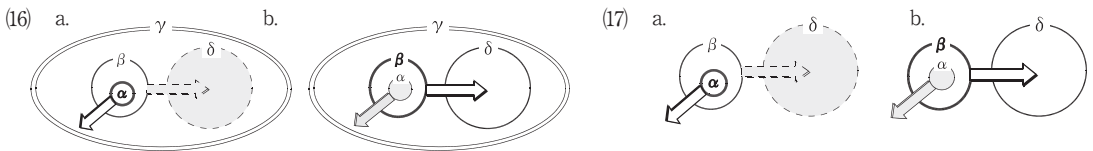
者として関わる場合、これになる。(13b)は緊密度が普通で、成員への関わりもさほど強くない。(13c)は緊密度が弱く、成員への関わりも弱くなる。ただし同じ動詞、同じ構文であっても、文脈に応じて複数のパターンにまたがることもある。(12)に話を戻すと、主語カテゴリー γ は、前景化される移動 (2つの内1つ) に強く関わる。もっと言えば、コントロールしている。そのため二重線で表記されている。

さてこの〈移動〉には、もう一つの意味、〈除去〉がある。場所 β から外への移動になるため、

この意味になる。(11)(12)では移動の場所が β に特定されていたが、〈除去〉では、移動の場所が β 以外の不特定になる。(14)がその例で、CLEAR VERBといわれる(15)のような動詞がこれになる。

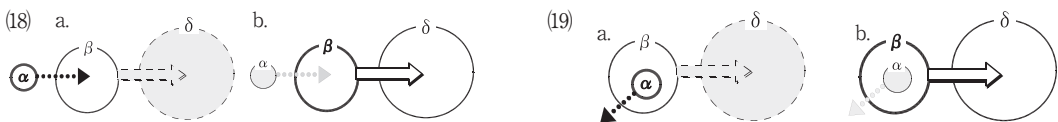
- (14) a. Henry cleared dishes from the table. b. Henry cleared the table of dishes. (Levin 1993: 52)
 (15) clear, clean, drain, empty (Levin 1993: 52)

これをカテゴリースキーマで示したものが(16)になる。 α の移動の向きが異なる以外は、すべて(12)と同じになる。これは(17)((11)に対応)をもとに、主語カテゴリー γ が加わったものになる。意味は違うが、基本構造は(12)と同じと言える。 α の移動によって、 β の状態変化がおこっている。(16a)が移動物目的語構文、(16b)が場所目的語構文になる。(16a)(17a)では移動物移動が前景化され、(16b)(17b)では場所変化移動が前景化される。そして残された方が背景化される。



以上見たように〈移動〉では、場所 β への移動と、場所 β 以外への移動の2つの意味がある(12)と(16)。移動物 α の方向は両者で異なっているが、基本構造及び意味の出現、交替現象においては共通している。

この〈移動〉の意味から、〈出現〉の意味へと拡張する。〈移動〉と異なり、〈出現〉では移動のプロセスがないか意識されない。この意味では、もっぱら自動詞文になる。ここでも〈移動〉と同じく出現する場所の違いで2種類あり、出現場所が特定されているか、不特定かで分かれる。各々スキーマを(18)(19)に示す。破線矢印で、出現を表している。(18)では特定の場所 β に出現し、(19)では β 以外の不特定の場所 δ に出現する。(18)は通常の出現で、(19)は消失の意味を持っている。(18a)(19a)は出現物主語構文、(18b)(19b)は場所主語構文になる。この2つのスキーマ(18)(19)は、(11)(17)と並行的である。移動物移動が出現物出現になっている以外は、すべて同じになる。



まず(18)の例として(20)(21)がある。このパターンになる動詞として、光の放出、音の放散、においの拡散、液体の放散、花の開花、振動・運動、SWARM VERB などがある (cf. Levin 1993, 磯野 2003, 岸本 2001, etc.)。具体的な動詞の一部を(22)に示す。

- (20) a. Jewels sparkled on the crown. b. The crown sparkled with jewels. (Levin 1993: 234)
 (21) a. Roses flowered in the garden. b. The garden flowered with roses. (Levin 1993: 251)
 (22) beam, burn, blaze, flare, flash, flicker, gleam, glitter, ... ; babble, bang, beep, buzz, ... ; reek, smell, stink ; drip, gush, ooze, splash, ... ; bloom, blossom, sprout, ... ; dance, flutter, pulsate, quiver, shake, stir, sway, tremble, ... ; abound, bustle, crawl, creep, hop, run, swarm, swim, teem, throng ... , etc.

(20)(21)は存在の意味ではない。複数あるものが順次意識にあがり、それらに気づくことで、あた

かも交互に出現しているかのように感じとっていることを表現している。場所格交替では、存在の意味を持たないので、純粋な存在動詞 (exist, extend, linger, ...) などは現れない (cf. Levin 1993: 250)。

複数が交互に出現するために、Salkoff (1983: 292-293) が述べるように、出現物は複数形か集合名詞でなければならない。また Dowty (2000: 115) が述べるように、短い時間で出現を感じるために、交替動詞が表しているのは知覚的に単純な活動であり、一瞬にして認識できるものになる。これはとりも直さず、意識が複数のものに移り渡り、あたかもそれが出現し続けているような感覚を持つためと考えられる。よって(20)-(21)を〈出現〉の意味とみなし、(18)のように表記する。

次に場所 β を起点とし、不特定の場所に出現する意味を見る。不特定の場所での出現ゆえに、消失の意味を持つ。スキーマは(19)になる。例を(23)に示す。(23)では雲がなくなることを意味する。場所格交替としては極めて周延的で、用例も動詞も少ない。ここに含まれる動詞は CLEAR VERB において、except を除いた(24)になる。

(23) a. Clouds cleared from the sky. b. The sky cleared (?of clouds)*². (Levin 1993: 55)

(24) clear, drain, empty (Levin 1993: 55)

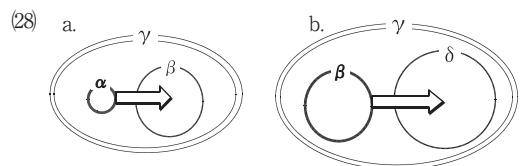
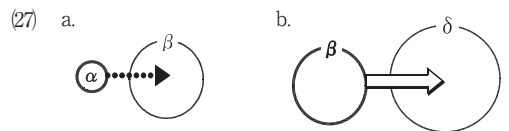
以上、場所格交替構文の意味をスキーマで表した。意味は〈移動〉と〈出現〉で、焦点化と移動／出現の場所にオプションがあったので、計8つある。これらは基本スキーマ(10)をもとにする。モノが移動したり出現することで、場所が状態変化を受ける。移動／出現と場所変化のどちらを前景化するかで、構文の交替が起こる。両方の意味を持つから交替が起こるのではなく、両方の意味が連動したスキーマを共有し、前半と後半で焦点推移することで場所格交替が起こると考える。

さてここで、場所格交替が起こらない構文のスキーマを見ていきたい。交替が起こらないとは、移動物／出現物構文か、場所変化構文のどちらか一方のみが適格になるものになる。上で8パターン (12)(16)(18)(19) 示したが、その中で代表として、移動物構文で考察する。具体例を見る。(25)では移動目的語構文のみ適格となり、(26)では場所目的語構文のみが適格となっている。

(25) a. Tamara poured water into the bowl. b. *Tamara poured the bowl with water. (Levin 1993: 51)

(26) a. *June covered the blanket over the baby. b. June covered the baby with a blanket. (Levin 1993: 51)

これらのスキーマは(10)を基本としない。つまりどちらか一方のスキーマ部分しかないものになる。スキーマで示すと、(27)(28)になる。(27)は自動詞文、(28)は他動詞文のカテゴリースキーマである。(27a)が出現物主語構文、(28a)が移動目的語構文で、移動物／出現物(α)が場所(β)に移動または出現する。一方(27b)は場所主語構文、(28b)は場所目的語構文で、場所(β)が属性(γ)へと移動する。一見すると(12)(18)と同じ意味に見えるが、背景化された部分があるかないかの違いがある。背景化されたものがないため、前景化・背景化の反転が起こらない。そのため交替が出来ない。もともと片方のスキーマしかないのである。なお他のパターンも同様の説明になる。



背景化した部分があるからこそ、前景化・背景化の反転が可能となり、場所格交替が起こる。しかしことはそう簡単ではない。移動物移動の部分で、前景化・背景化のオプションがある。このオプションにより、前置詞句を省略できるかどうか分かる。場所格交替構文では、前置詞句が省略できるかどうかで、さらに次の4パターンがある*3*4。ここでも移動物構文を通して考察する。

(29)では移動物目的語構文、場所目的語構文どちらも、前置詞句を省略できない。(30)では移動物目的語構文では省略できないが、場所目的語構文では省略できる。(31)では移動物目的語構文では省略できるが、場所目的語構文では省略できない。(32)では移動物目的語構文、場所目的語構文どちらも、前置詞句を省略できる。区別するために(29)をパターン1、(30)をパターン2、(31)をパターン3、(32)をパターン4と呼ぶ。

(29) パターン1

- a. *Pat heaped mash potatoes. b. *Pat heaped her plate. (Goldberg 1995: 177)
 (cf. a'. Pat heaped mash potatoes onto her plate. b'. Pat heaped her plate with mash potatoes.)

(30) パターン2

- a. *He stuffed the breadcrumbs. b. He stuffed the turkey. (Pinker 1989: 125)
 (cf. a'. He stuffed the breadcrumbs into the turkey. b'. He stuffed the turkey with the breadcrumbs.)

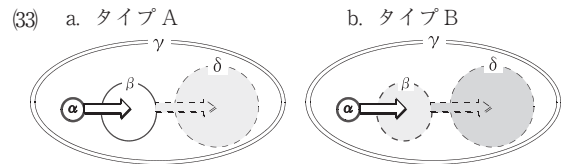
(31) パターン3

- a. He piled the books. b. *He piled the shelf. (Pinker 1989: 125)
 (cf. a'. He piled the books onto the shelf. b'. He piled the shelf with the books.)

(32) パターン4

- a. John packed the books. b. John packed the box. (Pinker 1989: 125)
 (cf. a'. John packed books into the box. b'. John packed the box with books.)

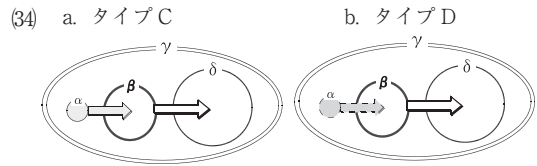
このふるまいの違いは、移動物移動の前景化・背景化のオプションの違いからくると考える。まず前景化のオプションをみる。移動物構文に、(33a) (= (12a))のタイプAがある。このタイプでは、前置詞句(場所 β)を省略できない。(29a) (30a)がこのタイプになる。



移動物移動 ($\alpha \Rightarrow$) と着点となる場所(β)の両方が前景化されているため、省略できないのである。次にタイプB (スキーマ(33b)) では、前置詞句(場所 β)が省略できる。タイプBをとる動詞では、移動物移動($\alpha \Rightarrow$)のみ前景化できると考える。この場合、 δ に加えて場所(β)も背景化される。しかし δ と β の背景化には差がある。 β が背景化されることで、その先の変化状態が想定されなくなり、 δ はさらに背景化される。このとき移動場所(β)はうっすら含意が残る。場所の結果状態(δ)と違って、移動すれば、着点があることは前提だからである。そのため δ と β は、背景化の度合いが異なると見なす。 $(\alpha \Rightarrow)$ のみ前景化されるので、前置詞句は省略できる。(31a) (32a)がこのタイプになる。

次に場所変化構文では、場所変化移動 ($\beta \Rightarrow$) と結果状態(δ)が前景化される。この前景化は保持され、オプションはない。オプションは移動物移動 ($\alpha \Rightarrow$) における背景化にある。移動物移動

($\alpha \Rightarrow$) が背景化で、弱い場合と強い場合がある。弱い背景化のスキーマが(34a) (= (12b))で、タイプCと呼ぶ。ここでは、移動物移動は背景化されているが、場所の状態変化の



前提となっているため、破線ではなく、直線表記で薄く背景化されている。弱い背景化なので、前置詞句は省略できない。(29b) (31b)がこのタイプになる。一方、強い背景化は(34b)で、タイプDと呼ぶ。この場合強く背景化されるため、移動物移動 ($\alpha \Rightarrow$) はほぼ意識されない(背景化は濃く、破線で表記)。強く背景化されているため、前置詞句は省略が可能となる。(30b) (32b)がこのタイプになる。

スキーマ(33) (34)をもとに、パターン1~4を表にしたものが(35)になる。(35)では、移動物目的語構文と場所目的語構文に、各々前景化・背景化に2つのオプションがあり、どちらを選ぶ

(35)

	移動物目的語構文	場所目的語構文
	前景化 (A : $\langle \alpha \Rightarrow \rangle + \langle \beta \rangle$)	背景化 (C : 弱い背景化)
	前景化 (B : $\langle \alpha \Rightarrow \rangle$)	背景化 (D : 強い背景化)
パターン1…(29)	タイプA (PP省略×)	タイプC (PP省略×)
パターン2…(30)	タイプA (PP省略×)	タイプD (PP省略○)
パターン3…(31)	タイプB (PP省略○)	タイプC (PP省略×)
パターン4…(32)	タイプB (PP省略○)	タイプD (PP省略○)

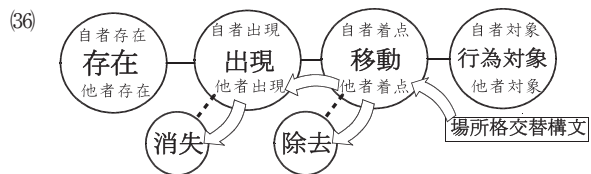
かで、前置詞句省略の可否が決まることを示している。ここで重要なのは、基本スキーマ(10)が維持されていることにある。タイプA~Dの違いは、単に前景化と背景化のパターンの違いに過ぎず、それにより意味や構文が変化する。

どのタイプをとるかは、各動詞の意味によって決まってくる。それはそのまま前景化・背景化の特徴へと反映される。移動物目的語構文の時に、移動物移動の意味が強ければ、タイプBになる。動詞は、もっぱら移動物移動に焦点をあてた意味となる。一方場所目的語構文では、場所変化移動の意味が強ければ、タイプDになる。動詞は、場所変化移動に焦点をあてた意味になる。

ここまで見ると分かるが、タイプBとタイプDは強調された意味である。移動物目的語構文では、移動物移動を表現する構文であり、その移動物移動を強調したタイプが、タイプBである。同様に場所目的語構文では、場所変化移動を表現する構文であり、その場所変化を強調し、移動物移動をより強く背景化するタイプが、タイプDということになる。ただ移動物移動と場所変化移動は連動していないため、(35)に示すように、4通りの組み合わせが生じる。(35)では移動物構文を考察したが、出現物構文でも基本同じ仕組みとなる。しかし以下では、議論を簡略にするため、スキーマは(12) (18)を基本として進めていく。

3. 意味のネットワーク

2節で場所格交替構文の意味は、〈移動〉と〈出現〉であると述べた。この〈移動〉と〈出現〉は別々に存在するのでなく、意味のネットワーク上に位置づけられている。それを示したのが(36)である。○が意味を、□が構文や動詞を表している。動詞や構文



は、意味が一つだけのこともあるが、隣の意味へと拡張し、複数の意味を持つことも多い。(36)には、場所格交替構文が書き込まれている。(36)はモノの視点からのネットワークで、基本の意味が4つある。〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為対象〉で、他動性の順に並んでいる*5。〈存在〉はある場所にモノが存在するという意味、〈出現〉はある場所にモノが新たに出現するという意味、〈移動〉はある場所からモノが移動するという意味、〈行為対象〉はモノが行為対象になるという意味になる。各意味はさらに自者と他者の2種類ある。それらの意味が、自者または他者のどちらに関わるかは、構文や動詞で指定される場合がある*6。

場所格交替構文でいうと、起点の意味は、〈移動〉と考えられる。〈移動〉は他者着点になる。他動詞文で、主語以外のものへと移動する。この他者への移動は、2節で述べたように、移動する場所が特定されている場合と、不特定の場合がある。不特定の場合、除去の意味になる。(36)では通常の〈移動〉から派生した意味として表記している。そして〈移動〉から、隣の〈出現〉へと推移する。ここでも他者出現であり、自動詞文の意味になる。〈移動〉と同様に、移動する場所が特定されている場合と、不特定の場合がある。不特定の場合、消失の意味になる。通常の〈出現〉から派生した意味として表記されている。起点から派生が広がれば広がるほど、用法と勢いは少なくなり、周辺的になる。場所格交替構文は起点となる〈移動〉の他者着点が基本である。もっと言えば他動詞文における場所交替が基本となる。そこから除去へと行く派生と、自動詞文の〈出現〉(他者出現)に行く流れがある。自動詞文の〈出現〉は、〈移動〉の基本形をもとにした意味なので、用例は多い。しかしそこから派生した消失の意味は、起点から一番遠く用法もほとんどない。通例一つの構文であれば、同一構文のまま意味が拡張するが、場所格交替においては次の2点において独自性がある。一つめは意味の拡張とともに、他動詞用法から自動詞用法に推移する。もう一つは、一つの意味内で、前景化・背景化のパターンを変えることで意味を変化させる。この2つにより、場所格交替は、他の構文より意味の多様性を獲得することになっている。

最後に入力動詞について述べたいことがある。場所格交替構文は、構文全体として〈移動〉か〈出現〉の意味を要求する。しかし入力動詞の意味は、必ずしも構文の意味と同一である必要はない。最終的な構文としての意味が、それらになればよい。そのため構文の意味は、そのまま入力動詞の意味を制限するものではない。

4. 部分的解釈と全体的解釈

場所格交替構文では、移動物／出現物構文と場所変化構文ではその含意が異なると言われてきた(cf. Anderson 1971 他)。場所変化構文では、場所の変化が全体に及ぶ全体的解釈になる。一方移動物／出現物構文では、場所の変化が部分的にとどまる部分的解釈になる。この違いは、当然ながらスキーマ(12)と(18)で説明される。

岸本(2007)があげる(37)の例を見てみよう。「塗り尽くす」が、場所目的語構文と移動物目的語構文で異なる意味になる。(37a)の移動物目的語構文では移動物が移動し終わったことを、(37b)の場所目的語構文では場所全体に移動が完了したことを意味している。

(37) a. ジョンは、赤い塗料を壁に塗り尽くした。(塗料が全部なくなる)

b. ジョンは、壁を赤い塗料で塗り尽くした。(壁全体が赤くなる) (岸本 2007: 99)

つまり場所目的語構文と移動物目的語構文は、スキーマが示すように異なる状況を表している。移動物出現物構文では単に移動物が場所に移動することのみ意味する。そのため場所の変化が全体に及ぶかどうかは分からないし、含意にない。移動を表すため、部分的解釈が優勢となる。(37a) と言えば移動の完了になる。一方場所変化構文では、場所が、ある別の状態に移動することを意味する。通例状態が変化するとき、その変化は全体に及ぶ。そのため、全体的解釈が生じる。(37b) と言えば、場所変化が完了したことを述べている。

しかしスキーマ(12)(18)は、全体に及ぶかどうか、全体を覆うかどうかを示していない。あくまで変化があったことを示す。実際岸本(2007: 98)が指摘するように、「少しだけ壁を塗る」では部分的影響を場所変化構文で表現することができる(cf. Kageyama (1980), 岸本(2001))。

(38) ジョンは、少しだけ壁を赤いペンキで塗った。

つまり場所変化構文だからといって、全体的解釈が必ずあるわけでもない。必ずあるのは、状態変化であって、場所への移動が全体的に及ぶことではない。例えば(39)では、ほとんどの火に水はかかっておらず、火は消える必要はない。水の移動が全体に及ぶという全体的解釈はないのが、普通である(39)は Jeffries and Willis (1984: 718))。

(39) a. The fireman sprayed the fire with water. b. The fireman sprayed water on the fire.

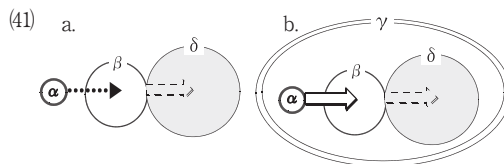
しかし火を全体として一つのかたまりと見なせば、変化はある。水がたとえ一部分にしかかからないとしても、火は形を変え、勢いも変わる。つまり場所である[火]の変化は、全体に及んでいる。

スキーマ(12)(18)にあるように、そもそも場所変化構文は、移動物移動が場所全体に及ぶことを意味せず、単に場所が別の状態に移動することを意味する。つまり変化することのみ要求する。そのため(39)は例外でも何でもなく、スキーマ(12)(18)に従う用例の一つと言える。

次に奥津(1981: 59)は、(40)の例をあげ、「唇」のような狭い場所だと、部分的解釈は出て来ないと述べている。つまりどちらにも全体的解釈が生じるとされる。唇が小さいために、全体に変化があったと見なされるのである((40)は奥津(1981: 59), 宮島(1972: 496))。

(40) a. 唇に毒々しくルージュを塗った女達 b. 唇を毒々しくルージュで塗った女達

しかしここでも、(40)は例外とは考えない。スキーマは基本同じだが、若干異なる。スキーマで示すと(41)になる。違いは、場所(β)と属性(δ)がくっついている。くっついているので、移動



のプロセスが感じられない。小さいなどの理由で、移動の開始がそのまま、状態の変化に結びついていると感じられる。そのため部分的解釈がないように感じられるのである。

しかしそれでも移動物/出現物構文では、結果状態は背景化されており、移動物が移動することのみを表している。(40)のような例もまた、スキーマ(12)(18)と基本同じであり、例外的なふるまいとはみなされない。違いは、単なる移動プロセスの長さと考えられる。

5. 他構文との関連

ここでは場所格交替動詞が、他構文（状態受身文、形容詞文）に現れると、〈移動〉や〈出現〉ではなく〈存在〉の意味を表すことを見る。まず(42)のように、状態受身文に現れることがある。(42a)は移動物移動構文から派生したもので、(42b)は場所変化移動構文から派生したものになる。

(42) a. The feathers remained stuffed in the pillow.

b. The pillow remained stuffed with feathers. (Levin and Rapoport 1986: 650)

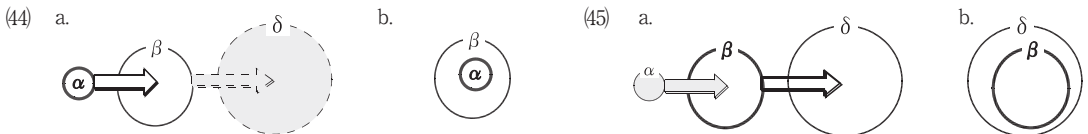
この場合〈移動〉ではなく、結果状態を表している（ネットワーク上の意味では〈存在〉）。状態受身文の構文の意味が、〈存在〉だからである。問題は、2節で述べたスキーマからどのようにしてこの〈存在〉の意味が生じるかにある。

本稿ではここでも、前景化と背景化が働くことにより〈存在〉の意味が生じると考える。

(42a) (42b)のスキーマは、各々

(43a) (43b)になると考える。(43a) (43b)では、移動の結果状態のみが前景化され、2つの移動部分は背景化されている（(44b) (45b)の部分が結果状態）。

生成プロセスを見る。基本のスキーマは各々(44a) (45a)になる（話を簡単にするため、主語カテゴリー γ は省略されている）。(44a)では場所変化移動のみ背景化され、(45a)では移動物移動のみ背景化されている。しかし状態受身文が〈存在〉を表すため、さらに前景化されていた移動部分も背景化される。それが(43a) (43b)になる。もともと背景化されたものはさらに濃く背景化されている。ただ結果状態を述べるので、結果状態を表す(44b) (45b)の部分が、組み込まれることとなる。



つまり同じ動詞であっても、現れる構文によって、前景化・背景化されるものが変わり、意味を変えていく。状態受身文は、結果状態を表すため、移動物構文であれ、場所変化構文であれ、各々の結果状態部分のみが前景化され、状態（〈存在〉の意味）を表すこととなる。

しかし(46) (47) (48)では、状態受身文は移動物目的語構文からの派生は不適格で、場所変化構文からの派生のみ適格になる。さらには(49) (50) (51)に示すように、通例の場所格交替構文では、どちらも不適格となる（(46)-(51)は野中(2015: 96-97)）。

(46) a. *Meaning was loaded into her voice.

b. Her voice was loaded with meaning.

(47) a. *Tears were loaded into her eyes.

b. Her eyes were loaded with tears.

(48) a. *Talent was loaded into John.

b. John was loaded with talent.

(49) a. *Mary loaded meaning into her voice.

b. *Mary loaded her voice with meaning.

(50) a. *Mary loaded tears into her eyes.

b. *Mary loaded her eyes with tears.

(51) a. *Nature loaded talent into John.

b. *Nature loaded John with talent.

この一見不思議なふるまいも、場所格交替構文のスキーマとスキーマ(43a)(43b)で説明される。まず場所格交替構文(49)(50)(51)が不適格なのは、モノ(α)が場所(β)へ移動しないからである。つまり物理的移動がない。場所格交替構文は、移動物構文であれ場所変化構文であれ、(10)のスキーマを前提とする。そのため物理的移動がない(46)-(48)での場所格交替構文はすべて不適格となる。同様に、移動目的語構文から派生した状態受身文(46a)(47a)(48a)においても、移動物が移動しないので不適格となる。では場所変化構文の状態受身文はなぜ適格になるのであろうか。

それはスキーマ(43b)から導かれる。(43b)にあるように、場所変化構文の状態受身文は、場所変化移動を追加で背景化するために、もともと背景化されていた移動物移動の部分が、より深く背景化される。そのため移動物移動の意味がより弱まっている。従って物理的移動の有無からの影響が弱まり、場所変化移動の状態受身文が可能になる。つまり2段階の背景化により、より深く背景化された部分は、影響力が弱く、(46)-(48)のようなふるまいになると考えられる。

次に場所格交替動詞が、形容詞文に現れるものをみる。次の例では、形容詞 abundant で場所格交替が起こっている。この形容詞文も、状態受身文と同様に、状態を表す(〈存在〉)。

(52) a. Food for birds {abounds, is abundant} in the marshes.

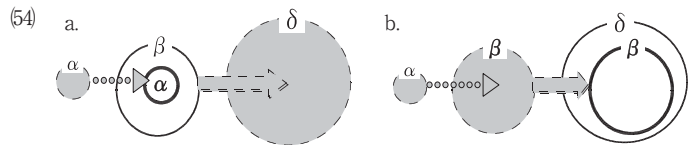
b. The marshes {abound, are abundant} with food for birds. (Salkoff 1983: 302)

(53) a. Fish {abound / are abundant} in the lake.

b. This lake {abounds / is abundant} with fish. (岸本 2012: 180)

しかし状態受身文と異なり、出現物出現や場所変化移動の意味合いがかなり薄れている。それらの含意はほぼない。そのため

スキーマは(54)に示すように、出現と移動はどちらも強く背景化されることとなる(図では濃い塗りで表記)。そのため移動は感じられにくく、実質、存在構造(44b)(45b)の部分のみが際立つこととなる。



ここでは場所格交替動詞が、状態受身文や形容詞文で現れる例を見てきた。たとえ構文の意味が異なる構文で現れようとも、基本スキーマ(10)は維持される。状態受身文では弱い状態性で移動性がやや残っている。形容詞文では強い状態性があり、出現性がほぼない。これを背景化の度合いの違いによって表記した。他構文が持つ意味と、動詞の意味が異なる場合、スキーマの前景化/背景化を変えることで、適格な文を作ることを示した。

6. まとめ

本稿では場所格交替構文を考察した。場所格交替構文は、共通して基本スキーマ(10)を持ち、〈移動〉と〈出現〉の意味を持つと主張した。〈移動〉は他動詞文、〈出現〉は自動詞文での意味になる。スキーマ(10)には2つの移動が含まれた。移動物(α)の場所(β)への移動と、場所(β)の属性(γ)への移動である。この2つの移動は、同時に前景化されることはなく、どちらかが前景化される。移動物移動が前景化されると移動物構文、場所変化移動が前景化されると場所変化構文になるとした。

移動物移動を、出現物出現に変えることで派生する意味が、〈出現〉であった。そして各々の意味には移動や出現の向きでオプションがあり、合計で8通りのスキーマ (12)(16)(18)(19) があることを示した。またスキーマを通して、場所格交替を起こさない動詞、前置詞句省略の可否、部分的解釈と全体的解釈の違いなども考察した。そして場所格交替での〈移動〉と〈出現〉の意味は、意味上のネットワーク上に位置づけられるとした。さらに場所格交替動詞が他構文と現れる場合、他構文の意味に合うように、基本スキーマ(10)の背景化の場所と濃さが変わることを示した。

カテゴリースキーマは、構文や動詞の意味を表記するだけでなく、意味拡張の可能性も示す。これまで二重目的語構文、結果構文、軽動詞構文など、カテゴリースキーマで分析してきたが、名詞及び名詞構文、動詞及び動詞構文をカテゴリースキーマで表記し、統一的に分析できる可能性がある。今後の課題としたい。

注

- *1 移動物目的語構文、場所目的語構文という用語は、野中(2015)でも用いられている。
- *2 (23b)で of 句が不自然なのは、of 句の特性から来ると思われる。丸田(2000: 249)が述べるように of 句は除去/消失されるものが何かを限定する働きをしている。(14b)で言えば、お皿以外のものがテーブルに残っていても良い。clear されたものが dish と限定しているのである。ここで(23b)を見てみると、空にあるのは主観的には雲しかない。そのため除去/消失するモノが、雲であると限定する必要がないからと考えられる。
- *3 Pinker(1989)では(30)(31)に派生の方向性を認めている。(30)の stuff は場所変化移動を基本とし移動物移動に意味が派生する。一方(31)の pile は移動物移動を基本とし場所変化移動に意味が派生するとする。それにより前置詞句の省略可能性を説明する。しかし本稿では、前置詞句省略の可能性は、単なる前景化・背景化のパターンの違いに過ぎない。動詞の意味により、異なるパターンがとれるかどうかにかかっている。共通のスキーマを維持しており、派生の方向性はない立場をとる。
- *4 岸本(2006, 2012)でも、Pinker(1989)同様、2つの意味の間で、派生関係があるとしている。そして「構文フレーム維持の仮説」によって、前置詞句省略の可否を説明しようとしている。
- *5 ネットワーク(36)は、別の観点、すなわち [移動] の観点からとらえることもできる。まず [移動] の有無で大きく2つに分けられる。〈存在〉は移動がない。一方〈出現〉〈移動〉〈行為〉は何らかの [移動] が関与する。〈出現〉では、[移動] の軌跡が認識されずに、瞬間移動みたいにモノが移動し、移動のプロセスが認識されない。そのため出現の意味になる。一方〈移動〉では [移動] の軌跡が認識され、モノが移動するプロセスが感じられる。最後に〈行為〉であるが、これも [移動] の軌跡が認識されるが、移動するものがモノではなく、何らかのエネルギーとなる。動詞や構文の意味を、行為や状態でとらえる代わりに、[移動] の有無、[移動] の種類で分ける可能性があるように思われる。
- *6 これまでの研究で、構文や動詞が、意味のネットワーク(36)でどのような意味を持ち、どのように拡張するかを考察してきた。迂言的使役構文、軽動詞構文、結果構文、二重目的語構文を扱った。本稿は、その研究の流れの中にある。

参考文献

Anderson, S. R. (1971) "On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation," *Foundations of Language* 7, 387-396.

- Dowty, D. (2000) "'The Garden Swarms with Bees' and the Fallacy of 'Argument Alternation,'" In: Ravin, Y. and C. Leacock (eds) *Polysemy: Theoretical and Computational Approaches*. Oxford: Oxford University Press, 111-128.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- 磯野達也 (2003) 「自動詞型 Locative Alternation: 動詞の意味、Event Structure、Headedness」『言語情報科学』 1: 17-33.
- Iwata, S. (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. Mass.: MIT press.
- Jeffries, L. and P. Willis. (1984) "A Return to the Spray Paint Issue," *Journal of Pragmatics* 8: 715-729.
- Kageyama, T. (1980) "The Role of Thematic Relations in the Spray Paint Hypallage," *Papers in Japanese Linguistics Kobe* 7: 35-64.
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎 (編)『(日英対照) 動詞の意味と構文』100-126. 東京: 大修館書店.
- 岸本秀樹 (2006) 「「山盛りのご飯」のゲシュタルトと場所格交替」影山太郎編, 「レキシコンフォーラム No. 2」233-250, 東京: ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2007) 「場所格交替動詞の多義性と語彙概念構造」『日本語文法』 7(1): 87-108.
- 岸本秀樹 (2012) 「壁塗り交替」澤田治美 (編)『ひつじ意味論講座 2 構文と意味』177-200. 東京: ひつじ書房.
- Laffut, A., and Davidse, K. (2002) "English Locative Constructions: An Exercise in neo-Firthian Description and Dialogue with Other Schools," *Functions of Language* 9 (2): 169-207.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. University of Chicago Press.
- Levin, B., & Rappaport, M. (1986) "The Formation of Adjectival Passives," *Linguistic Inquiry* 17(4): 623-661.
- 丸田忠雄 (2000) 「場所格交替動詞の LCS と使役交替」丸田忠雄・須賀一好 (編)『日英語の自他の交替』東京: ひつじ書房.
- 宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』東京: 秀英出版
- 野中大輔 (2015) 「英語の場所格交替動詞の拡張用法: 仮想変化表現の観点から」『東京大学言語学論集』 36: 93-102.
- Pinker, S. (2013) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. MIT Press. 104-6.
- 緒方隆文 (2018) 「二重目的語構文と意味のネットワーク」『ことばを編む』開拓社.
- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について」『国語学』 127: 60-48.
- Salkoff, M. (1983) "Bees are Swarming in the Garden: A Systematic Synchronic Study of Productivity," *Language* 59 (2): 288-346.

(おがた たかふみ: 英語学科 教授)

